

# 猫 蓑 通 信

第 99号  
平成 27年  
(2015年)  
4月 15日発行  
(年 4回発行)



## 連句の本質

青木秀樹

昨年法人化された一般社団法人日本連句協会は、連句の全国組織として連句文芸の普及活動を積極化することにしており、現在は体制強化に努めています。その日本連句協会の定例総会が三月二十二日(日)に日本青年館で開催されました。出席者は九十名強で例年とさほど変化はありませんが、だいふ若い世代の方が増えているように見受けられました。

今年役員改選の年であり、猫蓑会会員では式田恭子さん、吉田酔山さん、林転石さん、松尾博雄さんが理事に新任され、私と鈴木了齋さん、近藤蕉肝さんが留任しました。猫蓑会も連句文芸の普及活動の一翼をよりいっそう担うことが期待されていることとなります。

今回の全国連句大会で私の同席した席での二十韻の付け合い、ナオ三句目からナウ折立の運びを記します。

肌に着て木綿と絹の違い知り  
道ならぬ恋火祭の夜  
光男  
照子

夢の月彼と浮遊にミツフィーも

刺されば痛い毬栗の棘

秀樹

綾

幼き日みな語んじた電車の名 千恵子

連句歴五十年になろうとする長老、連句経験一年半の熟年女性、作句歴三年の二十代前半の女性、後のふたりは連句経験三十年を超す猫蓑会会員でした。これを見ると、連句は年齢や経験に関わらず楽しめることがわかります。国民文化祭や全国連句大会に参加すると、さまざまなレベルの方々と出会います。人それぞれの発想の違いがあり、式目をあまり知らない人でも捌の誘導があれば一座して連句を楽しむことができます。連句の実作を通して連句の本質を伝えてゆけば、初心者でも将来みな優れた連句人になることが期待されます。

東明雅先生は連句復興期に「形式や式目は自然にある方向にむかいそれが固定するのはよいけれども、人為的に無理に一定しようとする必要が破綻するだろう。」(『季刊連句』創刊号・昭和五十八年六月一日)と記されおり、その後「私は将来いかに変化・変貌しようとする絶対に失ってはならぬものは、作品を作り出すこの文芸独自の運動であり、メカニズムであると思

## ●目次●

第百三十二回猫蓑例会・初懐紙作品

歌仙九巻

初護摩や

紅うすく

世吉

薬師粥

健やかに

御慶かな

言の葉の

御慶かな

初富士

温故知新15…対機説法と面々授受

事務局たより

う。」と記され(同)、連句の本質は「付けと転じ」にあることを強調されています。式目とは一巻の中で後戻りをしないための古人の知恵の結集であり、連句のノウハウとして臨機応変に対処すればよいものでしょう。

私はそれに加えて連句は複数の連衆がそれぞれの個性を発揮しながら、協調してひとつの作品を巻き上げることが連句文芸の本質のひとつであることを重視すべきであると思っております。小異を捨て大同につくことが大事であり、いたずらに自己主張をしないことが連句普及に必要であると思います。明雅先生は最晩年「連衆心を大切に」と主唱されましたが、これは連句を競争であると勘違いした人々を諫めた言葉です。連衆の和を大切にすることを猫蓑会の特性にしたいものです。

8 6 6 5 4 3 2

土竜打の座

歌仙「初護摩や」 副島久美子 捌

初護摩や吾が方に寄す大煙 久美子

鏡餅には割れの吉相 転石

ふらここの高み高みへ漕ぐならん ふみ

雪虫ひとつ受ける掌 明子

牧開き準備をさをさ月上る 敦子

チームの課題品種改良 石

ウ 縄文の遺跡発掘造成地

いつの間にやら集ふ野良猫 敦

早くしろロングブーツを脱ぎ捨てて 明

湯婆代り抱きしめしまま 全

元総理女装したとかしなないとか 全

月に照らされ語る浄瑠璃 明

落鯛を捌く俎板正目なり 石

北山杉の里に冬待つ 敦

巡回の地域医療の車来て 明

ポイントカード財布いつぱい 石

虹の橋渡つて聞かう花言葉 明

寝莫産の跡がついて夢さめ 全

ナオ 壁一枚神の異なるイスラエル

短波放送イマジンの歌 敦

鳥飛ぶ高圧線をすれすれに 全

師走選挙に比例当選 石

ノーサイド涙噛みしめラガーマン 明

三田の校門前に古書店

源氏香一種五包の組合せ

素裕母のおさがりの青

眼の色に嫉妬の影を潜ませて

捨てる捨てない天秤にかけ

新走りぬる爛にして窓の月

松の手入れはいつもあの爺

ナウ 故郷の秋果近所にお裾分け

復興道路やつとつながる

絵葉書に身辺つづること多く

鸚鵡の声に相づちを打ち

妖精の腰掛けてある花の枝

ゆるき坂道下るうららか

み

連衆 林 転石 中村ふみ 野口明子

武井敦子

み

久

明

み

石

敦

明

み

石

敦

明

み

石

敦

明

小豆粥の座  
歌仙「御慶かな」 上月淳子 捌

雲海に機長の述べる御慶かな 淳子

トレイに小さき屠蘇散の盃 雅子

開幕の柝の音高くひびくらん 要子

裾ひるがへし降りる階段 美奈子

仕事終へ家路をたどる月今宵 正夫

松茸飯は冷えてしまった 一枝

秋の駒帰農青年眉上げて 枝

すれ違つたは幼馴染か 奈

更くるまでリベルタンゴの悩ましく 全

謎の深まる推理小説

国芳の猫の騙し絵賑やかに

木魚必死に叩く荒行

もう一番縁台将棋きりもなし

夏の霜置く仕舞屋の屋根

衆院選共産党が票伸ばし

箆筒預金がやがて底つく

だし巻のつもり沢庵花の宴

てるてる坊主あすは遠足

ナオ 山わらふすめらみことの眠る陵

ふるさとの民さきくあれかし

いつの日か認知症などなる不安

笑点大喜利まだ続きをり

パックツアー凸凹コンビ巴里へ行く

地下鉄を出て焼芋を買ふ

密会を重ねる度に肝すわり

悪い女に捧げ純愛

試験管培養されてひよるひよると

昨日描いた栄光の夢

バーボンに放歌高吟寮の月

塀より覗く色変へぬ松

ナウ 健さんの背の飄々と鳥渡る

アトランダムに配るトランプ

役員に担がれましたうちの祖父

虚実なかばに書きし自分史

花吹雪鯉木高く社占り

浅蜷塩吹くキッチンの間

要

淳

要

枝

奈

夫

夫

要

雅

夫

雅

枝

要

枝

夫

雅

奈

奈

雅

夫

要

夫

雅

枝

全

雅

奈

要

夫

奈

枝

要

淳

要

太夫猿の座  
歌仙「紅うすく」 倉本路子 捌

紅うすく引いて卒寿や初詣  
若菜の粥を包むてのひら  
琴の音の溶け込んでゆく梅林に  
野良猫のらりくらし散歩す  
藍襖の機嫌うれしき今日の月  
客を集める錦秋の宿  
回し呑むどぶろくはやも歌の出る  
笑ひとばしてケセラセラセラ  
入籍は十六歳のバースデー  
すでに下着は横紐の黒  
旗並ぶやうに洗濯物の揺れ  
金魚を照らす裸電球  
夏月に倍率上げる望遠鏡  
観測マニアアタカマへ飛び  
隊列をふいに横切る妙なものの  
星の王子が見つけたと言ふ  
薄墨の花のまぎるる夕間暮  
父母逝きて春深むなり  
ナオぶらんこをひたすら高く漕ぎ続け  
とどこどころに湯煙の立つ  
蹴轆轤の壺挽き上げる老大家  
二つの祖国どこも故里  
満票で芥川賞射止めたり

悠 全 乃 通 有 乃 斎 悠 斎 乃 有 通 全 斎 全 有 斎 有 乃 冬 未 通 了 路  
悠 全 乃 通 有 乃 斎 悠 斎 乃 有 通 全 斎 全 有 斎 有 乃 冬 未 通 了 路

平成二十七年一月十八日  
於 新宿ワシントンホテル新館

山寺の僧降りてくる冬  
ファムファタル厚き氷に閉ぢ込めて  
心中沙汰を噛ひ合ふ闇  
どの局も馬鹿な番組ばかりなり  
店屋物にて済ます正餐  
ビル街の月もわたしも瘦せてゆく  
格子冷えたる牢獄の窓  
ナウ運動会活躍の子が眼裏に  
夢は寝て見るものと限らず  
神子様ワイン蘊蓄きりもなし  
土に埋るる黄金の杯  
どこまでも舞ひゆく花としやぼん玉  
蜂の羽音のよぎる鼻先

悠 路 斎 乃 斎 有 悠 全 通 斎 乃 斎 有

繭団子の座  
歌仙「言の葉の」 島村暁巳 捌

言の葉の海を尋ねむ初懐紙  
春着の袖をつまむ左手  
新幹線広き裾野を巡るらん  
ビュツフェの料理送る写メール  
鱧切りはプロに任せて月賞つる  
泰山木のはらと散る頃  
遠鐘を聞きつつ僧の道を分け  
幼馴染とばつたりと逢ひ  
図書館のいつもの席は恋の席

悠 路 斎 乃 斎 有 悠 全 通 斎 乃 斎 有

悠 路 斎 乃 斎 有 悠 全 通 斎 乃 斎 有

けふは来ないのラインしてみる  
やや寒に苦い珈琲啜りをり  
お白粉の実を鼻に伸ばす児  
月は池月は川辺も湖も射し  
廻す地球儀イスラムは何処  
行つたねえあそこのカレー変つてた  
板長ちよつと長い前説  
朝ぼらけ風やはらかに花開く  
靖国祭に集ふ叔父叔母  
ナオ早稲田ゆく路面電車でのどらかに  
ぶらんぶらんと根付ゆれをり  
香具師といふ商売上手旅上手  
タツクル果敢ラガー魂  
白鳥の愛の遍歴なれの果  
酔へばをみなはみんな美し  
庭のある小さき館は坂の上  
急に吹き出す噴水の列  
一族は東南アジアへ行つたきり  
象の背中に乗ることが夢  
鍵盤に飛び跳ね月の円舞曲  
忘れ団扇を片づける人  
ナウ漱石に甘える猫の冬隣  
火除けの札はへつつい陰  
天井の木目数へる熱気配  
苦しかつたり悲しかつたり  
自分史は語らぬ覚悟花篝  
暮色蒼然うらかな景

悠 路 斎 乃 斎 有 悠 全 通 斎 乃 斎 有

悠 路 斎 乃 斎 有 悠 全 通 斎 乃 斎 有

連衆 式田恭子 須賀敬子 前田曜子  
松本碧 由井健

左義長の座

歌仙「世吉」

若林文伸 捌

明雅先生に見えてより星霜四十四年

師と会ひて世吉となりぬ初懐紙

表を終へて年酒酌みあふ

時差につれ地球の朝の巡るらん

届け麦笛高き月まで

夏休み漫画タッチでスケッチし

罅の微妙な柵の陶磁器

白黴も青黴もある乾酪店

失意での旅聖地訪ねる

名も知らぬ人の優しさ胸に沁む

互ひに交はずハングルの文

祖父祖母を敬ふ慣ひ大らかに

鼻をべろりと灰猫の舌

鮫鱈の吊し切りとは御無体な

七不思議聴く幽閉の塔

回送のバスの二階に月の射し

茶色の壘につくる榎檀酒

桃山の覇者偲びつつ花相撲

豪華景品出ます出します

ナオ 押入れの隅に春画の眠りあて

徐々に遠のく停年の歳

思ひ立ちトレッキングはヒマラヤへ

ポプラの絮を道標にして

泡雪に少女の抱く恋心

文伸

洋子

秀樹

俊子

瞳

樹

洋

樹

瞳

伸

樹

俊

洋

全

瞳

樹

洋

全

俊

瞳

樹

洋

樹

復活祭で実る求婚

名作のリメイク版はヒットせず

百万石の駅舎ご立派

庭仕事節くれだつた指の技

元探偵の当たる占ひ

半月のうつすらとある朝ぼらけ

美術展へと畏友誘ふ

ナウ 秋裕三人姉妹お揃ひに

虫歯の疼く自公大勝

クリニックコンビ二程に此処彼処

燕新顔越して来ました

花片はご住持の後渦巻ける

夢の豊漁続く鯛網

連衆 大島洋子 青木秀樹 三木俊子

北爪 瞳

俊

瞳

洋

洋

樹

俊

洋

樹

洋

瞳

伸

俊

大黒舞の座

歌仙「御慶かな」 松島アンズ 捌

物干の竿にも申す御慶かな

元日草の咲ける坪庭

春うらら四角四面の顔もなし

炬燵塞ぎてぐんと伸びせる

月明り堂々とゆく子持ち猫

スクランブルの青が点滅

ナウ 也有園に茶室できたつてほんとだよ

金平糖をころり振り出し

熟年のクラス会ではうぶな恋

アンズ

豊美

壽子

照子

美代子

昭

壽

ア

照

灯り消してと恥ぢるをちさん

めくるめく曹達水の中の騒

蟬時雨降る山門の額

禁煙を破つてしまふ夢の覚め

外套の襟立てて見る月

スーダンの幼き瞳 哀切な

太古の河の悠然として

贈られし苗木はいまや花万朶

宙返りする囀の下

ナオ 鉦鳴つて靖国祭始まりぬ

デモ行進に車椅子でも

メトロにてスマホ弄らぬいい女

二十五階で何の秘め事

ふとわれも汚れてみたき泥の水

氷の微笑美しき畏

行く末は卒塔婆小町と流離へる

妖怪ウオッチ孫に教はり

ロボットはどんだん賢くなるけれど

成長しない政治家と僕

蛇皮線の舟唄遠く月今宵

味に幅ある新酒利酒

ナウ 秋の風分かされ石に立止まり

サイクリングの宿は茅葺

絵手紙は大願成就の言葉添へ

駆込み寺の今も昔も

面影にをとめの花の頸飾り

しやぼん玉にはそれぞれの空

連衆 高橋豊美 杉山壽子 田所照子

山田美代子 松原昭

美

壽

美

昭

豊

照

美

昭

壽

豊

照

美

壽

豊

照

ア

照

豊

照

壽

昭

豊

美

豊

ア

昭





初音笛の座

歌仙「健やかに」

齋藤久美 捌

健やかに連衆揃ひ初懷紙

久美

春着の袖の色のとりどり

千恵子

梅が香の漂ふ苑を巡りゐて

文字

駐車場には薄き残雪

鄭和

ルナロッサ風やはらかに上りくる

道子

長靴履いた猫を探しに

恵

大洋を越える気球の夢抱へ

和

ふたりで作る未来明るし

文

チイママが座る会長夫人の座

恵

ダイヤどころぢやとんと箸棒

和

抜けるよな夏空眺めあ空し

文

月は何処ぞ虎が雨降る

全

狂言に因みの銘の樽並び

恵

太鼓神社の鳥居くぐつて

道

階段をグ・リ・コで昇る子ども達

恵

レリゴレリゴで埋まる会場

和

花の奥老荘の道訪れむ

文

みぢんこに知る宇宙うららか

道

ナオ 永き日のお堀の水はエメラルド

和

江戸詰め久し殿にご無沙汰

道

寒村に流行る奇妙な眠り病

恵

NPOの配る靴下

道

柚子の湯に次の朔旦思ひたり

文

門の南天雀集まる

曼荼羅に諸仏菩薩のひしめきぬ

悪魔の罫に共に墮ちやう

ダメよダメ年上の女に惚れちや駄目

ドーランのままスナックへ行行く

月を背にさしたる用は無かれども

焼栗売に声を掛けられ

ナウ 巴里ベルリン テロの恐怖のそぞろ寒

ペンの力を我は信ずる

百均で買った便利な垢掬ひ

道

文

恵

全

和

全

文

恵

文

文

## 温故知新

15・対機説法と面々授受

発句はとり合物也。二つとり合はせて、よくとりはやすを上手と云ふなり。

森川許六『篇突』元禄十一年（一六九八）

発句は、只金を打ちのべたる様に作すべし。

向井去来『旅叢論』元禄二年（一六九八）

解題●『旅叢論』は、『篇突』に対する反論の書だ。引用部分は発句の作り方についての両者の主張。許六は現代風に言えば「二物配合」による二句一章体の作句こそが「上手」だと主張し、去来は一句一章体の一物作句を目指せと主張している。

問題は、両者とも、自分はそのように芭蕉から教

遁走曲の果てしなきこと

殊の外楽しき刻は花の下

お軸拝見舞ひ出づる蝶

連衆 鈴木千恵子 橘文字 高山鄭和

藤沢道子

平成二十七年一月十八日

於 新宿ワシントンホテル新館

恵

美

道

とまつた論述を残さず、断片的な「対機説法」を弟子が記録した言葉だけが残されている例が多い。

釈迦、孔子、キリストなどは「書く」ということがまだあまり普及していなかった古い時代の人だが、彼らが「総論」「極意」などを書き残さなかったのはそのせいだけでもないだろう。近い時代でも近代言語学の父と言われ、構造主義の元祖の一人とも目されるソシュールは、肝心の一般言語学については著作を残さず、弟子が講義を聞いて書いたノートが残っているだけだ。芭蕉も、とまつた俳論書を残していない。弟子たちからそれを書くことを求められてもいたし、一度は書きかけた形跡もあるが、結局破棄してしまった。人々が自分の書いたものに頼り、またそれが人々を縛り、俳諧の可能性を狭めることを恐れたのだという。それだけかどうか、考える余地は残っているが、とにかく芭蕉は個々の「現場的」な状況を抜きにして汎用的、総論的な一般論を語ることを好まなかった。

互いの関連性が必ずしもはっきりしない断片的な対機説法には、多くの創造的な解釈の余地が残されている。これらの祖師の開いた道がその後の様々な現実幅広く対応し、大きく発展することを可能にした要因の一つがそれだとも考えることが出来る。

逆に、解釈の余地が多いことが、弟子の間に様々な分裂、分派をもたらし、あるいは、必要に応じてどんな恣意的な解釈をしても勝手次第、といった退廃さえもたらした、という側面も考える必要があるだろう。

解釈の余地が多いからこそ創造的だということ、俳諧のような文芸に携わっている人にとつては納得しやすいと思うが、他方、創造性が暴走して「何でもあり」「好き勝手」「支離滅裂」などに至る危険にはどう対処したらいいのだろうか。

たとえば「最低限これだけは守る」といった類の「金科玉条」を皆で台意する、といったことが。どうもそれでは違う気がする。実際、これらの祖師が開いた道で、そうした対処法が師の死後に試みられた例は多いが、その試み自体が新たな分裂や墮落の原因になるだけだったのではないだろうか。「金科玉条」と書けば美しいが「教条主義」と書いても同じことだ。

宗教だけでなく、武術、武道の世界にも似たような事象が見られる。筆者の乏しい経験からしても、そこで人を指導する際には、何事も断定的に語りざるをえない。対戦の個々の瞬間に、あれこれ迷っている余地はなく、ここではこうせよ、とその都度明確に断定的に語らねばならない。「このことは、こういう面から考えるところだが、別の面から考えるところ……」といった理屈を頭で考えても、瞬間の打ち合いには間に合わず、迷いのある拙い動きの原因になるだけだ。指導は「対機説法」にならざるをえない。

武術に限らず、対戦型のスポーツやバイクレースなど、極限的な状況を前提とするスポーツ、また音楽や舞踏などにも、指導については同じようなことがあるのではないだろうか。バイオリニストの千住真理子氏が、いつも演奏を師から叱られまくって、その都度家に帰ってからその意味を懸命に考えたと言っているのを最近聞いたが、それも似たようなことだろう。そういうえば、去来も発句の出方を芭蕉に厳しく叱責された逸話を書き残している。

宗教、武術、スポーツ、音楽等、それぞれに違っても、みな心身の働きを探索するものだ。みな対象自体が固定せず、常に複雑に変動し続け、かつ無限に「深い」から、一般的な言葉や理屈だけではとらえ切れないし、人に伝え切れることも出来ない。

指導するその都度の状況は違うから、断定的に教

える言葉もその都度違い、互いに矛盾することも多いが、それは問題ではない。その都度違つたが、その都度の対応の経験の集積から、それら個別の指導が、矛盾しているようでも通底していることを体がわかってくる。だから、師と直接対面して教えを受ける「面々授受」が大切なのだ。そういう要素が後世にうまく伝わらず、形骸化して言葉だけになってしまつと、いろいろな「流派」の乱立になるころ、武術その他も宗教に似ている。

俳諧もこれらと同列だろう。詩歌とは、普通の言葉では表現しきれないものをなんとか言葉で表現しようとする営みだ。しかも俳諧は、人との言葉のやりとりを通じてそれを行う。言葉は文字にすれば固定的に定着されたように見えるが、実際は書記も発話も、読書も傾聴もすべて、変化してやまない人と状況の流動的なかかわりだ。俳諧はそういう流動的な言葉の運動を最も生々しく映し出す文芸形式だ。

自分は師からこう習つた、ということ、教条として後進に伝えても意味がない。別のときには違つたことを言ったかもしれない可能性は常に残されている。師の経験と自分の経験を重ねて「身に付け」、更に前に進もうとする、俳諧そのものの修練の不断の積み重ねなしに、師説を受け継ぎ、後世に伝えることはできない。固定的な言葉や理屈・理論としてはなく、そういう実践過程、面々授受の連鎖を現実はどう作っていくか、ということとしてしか、この問題には対処できないだろう。明雅先生はいつとも、個々の実際の俳席に臨んで、また実際の作品に即してこそ、様々なことを私たちに教えて下さつた。明雅先生も芦丈先生からそのようにして学んだ。

「古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよ」(芭蕉『柴門ノ辞』)とはそういうことを通してしか実現できないのではないだろうか。(斎)

事務局だより

●第百三十二回例会（平成二十七年初懐紙）が開催されました

一月十八日（日曜日）、新宿ワシントンホテル新館にて、本年の初懐紙が開催されました。九卓に分かれて歌仙を興行し、全席披露ののち、午後五時に閉会しました。当日の歌仙九巻は、今号のP2～P6に掲載されています。



初懐紙実作会風景

●今後の予定

●第百三十三回例会

平成二十七年藤祭正式俳諧興行・二十韻実作会  
四月二十二日（水曜日）  
十二時～十七時（受付十一時より）  
於 亀戸天神社

●第百三十五回猫養同人会総会・歌仙実作会

六月二十一日（日曜日）  
十一時～十七時（受付十時半より）  
於 新宿ワシントンホテル新館

●第百三十四回例会

平成二十七年総会・歌仙実作会  
七月十五日（水曜日）  
十二時～十七時（受付十時半より）  
於 江東区芭蕉記念館

●第百三十五回例会

芭蕉忌正式俳諧興行・明雅忌脇起源心実作  
十月二十一日（予定）  
於 江東区芭蕉記念館

●第百三十六回例会

平成二十八年初懐紙  
一月十六日（土曜日）  
十一時半～十六時半（受付十一時より）  
於 原宿南国酒家

●猫養基金にご協力ありがとうございます

●源心庵の会様 平成二十七年二月 五万円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通預金 3376045

●各種募吟にふるってご応募ください

●第三十回国民文化祭・かごしま2015文芸祭  
「連句大会」募吟  
形式…半歌仙

締切…平成二十七年五月三十一日（消印有効）  
応募料…一巻につき二千円



国民文化祭連句大会は、今年十一月十四日（土曜日）から十五日（日曜日）にかけて、鹿児島県鹿児島市で吟行会、交流会、募吟受賞作品表彰式、連句実作会が行われます。大会当日にもふるってご参加下さい。なお、募吟応募は大会当日参加のための必須条件ではありません。応募要項その他は、日本連句協会オフィシャルサイトから入手できます。

日本連句協会オフィシャルサイト

<http://renku-kyokai.net/>  
同サイトには、各地で開催されるその他の連句イベントや募吟なども紹介されています。同サイトには、猫養会オフィシャルサイトからもリンクしています。

●バックナンバー

「猫養作品集」バックナンバーご希望の方は鈴木千恵子まで。

「猫養通信」バックナンバーは創刊号以下すべて猫養会オフィシャルサイトで閲覧できます。

●猫養会オフィシャルサイト

<http://www.neko-mino.org/index.html>

季刊 『猫養通信』第九十九号

平成二十七年四月十五日発行

猫養会刊

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイト株式会社